

を入れます。実線は、各問題についての正答者数を合計したときの区切りで、正答率の累積分布、難易度などを示し、Pライン又はP曲線と呼ばれます。点線は、各生徒についての小問の正答数を合計したときの区切りで、生徒の得点の累積分布、学習の到達水準などを示し、Sライン又はS曲線と呼ばれます。

2 「つまずき」の診断

実線は、問題についての正・誤答数の境界線で、学習の到達水準の高い生徒ほど表の上の方に示されていますので、この線より上部に誤答が混入するということは、応答の態勢としては決して望ましいことではありません。この場合には、問題が妥当であるかどうか検討する必要があります。例えば、表2の間8は実線の上部に誤答が多く、しかも誤答のばらつきも大きいので、問題の内容、表現について検討が必要です。また、問題番号は、難度を予想して易から難に向けてつけてあるとすると、問7、8、9の結果はかなり予想と食い違っています。このような場合、生徒の実態をさらに検討するとともに、これらの内容に関する事項の指導については、きめ細かな配慮が必要になります。さらに、問19は中程度の生徒にもあまり定着していないので、定着するように徹底させる必要があります。

点線は、生徒の学習の到達水準を示しているが、この線の右側に正答が混入している割合が高ければ、異質であると考えられます。例えば、Dの生徒やNの生徒は、正答と誤答が拡散した状態で分布しています。この二人は、かなり能力がありながら、学習にむらがあり、安定していない様子が見取れます。Jの生徒についても、この傾向が見られます。いずれも日常の学習のあり方について、個別指導の機会を多く取り入れる必要があります。

Eの生徒からQの生徒まで上位4名については、習熟の程度が高く、おおむね目標が達成されたと考えられるが、Sの生徒の間14は、不注意によるミスのためかどうか調べてみる必要があります。Pの生徒以下については、正答率も低いので、到達目標を検討するとともに、さらに個別指導の機会を多くし、はげましながら習熟の程度を高める必要があります。Cの生徒については、かなり程度の高い問題もできているので、家庭学習の状況などについて